【原著】 大学入試研究ジャーナル第 29 号，79-84，2019

山口大学の一般入試における高校調査書活用の検討

林 寛子（山口大学）

AO 入試同様、高校調査書を用いた加点評価を一般入試で行った場合，何を評価することになるのだろうか。大学入試における格差の問題が指摘される中で，主体性・協調性の評価の在り方を検討することが本稿の目的である。本報告の分析結果からは，高校調査書を用いて資格取得や活動経験を評価する入試を行った場合，特定の生徒に有利にはたらくとは言い難い。高校調査書の内容は，高校の教育，進学指導の効果が含まれていると予測できるが，高校調査書活用の問題の一つである大学入試における格差の問題について，可能な限り現状を把握することは，重要な課題である。

1 はじめに

大学入学者選抜実施要項では，「各大学は，入学者の選抜を行うに当たり，公正かつ妥当な方法によって，入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に判定する。その際，各大学は，年齢，性別，国籍，家庭環境等に関して多様な背景を持った学生の受入れに配慮する。」「能力・意欲・適性等の判定に当たっては，入学者受入れの方針に基づき，学力を構成する特に重要な以下の三つの要素（①基礎的・基本的な知識・技能，②知識・技能を活用して，自ら課題を発見し，その解決に向けて探究し，成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力，③主体性を持ち，多様な人々と協働しつつ学習する態度）のそれぞれを適切に把握するよう十分留意する。その際，入学後の教育との関連を十分に踏まえた上で，入試方法の多様化，評価尺度の多元化に努める。なお，高校の学科ごとの特性にも配慮する。」（大学入学者選抜実施要項，2017）と示されている。大学は，多様な背景を持つ人に，多様な入試方法，多様な評価尺度で大学入試を実施することが求められている。

また，大学は高校調査書の活用も強く求められている。「『高大接続改革実行プラン』の策定について」（文部科学省，2015）では，各大学における個別選抜は，学力の三要素の「思考力・判断力・表現力」と「主体性・多様性・協調性」を評価することが求められ，その評価の方法として小論文，プレゼンテーション，集団討論，面接，推薦書，調査書，資格試験等を用いた評価が示された。特に，大学入試の選抜資料として高校調査書の積極的活用が求められている。

大学はこれまで入試改革を繰り返してきた。山口大学の入試改革に限定して振り返ってみると，2002 年度入試における AO 入試の導入は大きな改革であった。一般入試における従来の学力試験では見いだせなかった資質・能力を評価するために新しい試験方法を開発した。書類評価（志望理由書，自己 PR 書，活動報告書），講義等理解力試験，面接試験を実施し，受験生の能力，適性，意欲，関心などを多面的，総合的に評価することを試みた。もちろん，多元的な評価尺度の一つとして高校調査書も積極的に用いている。英語の外部検定試験を始め，高校生のさまざまな資格取得は主体的学びの一つとみなし，評価している。また，高校時代の諸活動は必ず他者との協働を経験していることから，協働性・協調性として評価している。

現在の山口大学 AO 入試では加点評価対象となる高校時代の諸活動を公表し，活動確認は高校調査書を用いている（林 2018）。山口大学 AO 入試は，全国からあらゆる学科の高校生が志願している。また，社会人や帰国生徒の志願もあり，多様な背景を持つ人が志願する入試となっている。そして今，大学入試改革では全ての入試において多様化が求められている。

山口大学の入試改革の一つとして，一般入試における高校調査書の積極的活用，評価尺度の多元化を検討している。山口大学の一般入試における高校調査書の積極的活用は，AO 入試と同様に利用することが一つの選択肢として考えられ，技術的には可能であることを確認した（林 2018）。しかし，技術的には可能であっても，AO 入試同様の調査書利用で一般入試の評価の多元化になりうるのか疑念が生じる。

AO 入試は一般入試や推薦入試との差別化を意識して企画してきた。AO 入試は志願者のプラス面を見出して評価する。そのため，志願者および高校からは合否の理由がわからないという意見が寄せられてきた。そこで，プラスに評価する内容の詳細を明らかにしたほうが志願者は挑みやすいという判断から，加点評価項目を公表し，さらに面接では諸活動等の詳細を確認している。一般入試で全員面接を実施することは現状では想定しにくいが，AO 入試同様に高校調査書に記載されている内容を評価すれば，入学区分の特色はあ

いまいになるであろう。また，一般入試の合否の理由もわかりにくいものとなるであろう。他とは違う経験をもつ者に対して加点してきたものが，誰もがもつ資格・経験となれは，評価に値しなくなるであろう。実際，大学入試において英語の外部検定試験の利用が求められ，全ての志願者が外部検定試験を受けてくることになる。英語外部検定試験の活用については，経済的に困難な受検生への配慮，障害等のある受検生への配慮等を求める意見がある（between 2017）。経済的に困難な受検生への配慮等の部分は特にクローズアップされ，英語外部検定試験の活用は子どもたちが塾や予備校に頼る傾向が強まり，家庭の経済力や生活する地域での格差を助長するという言説が増えている（朝日新聞 2018）。

そこで，AO 入試同様、調査書を用いて主体性・協調性の評価を一般入試で行った場合，高校時代の資格取得や諸活動を単純に活動の有無で評価することによって格差の問題が生じるのか，志願者の高校調査書の現状を確認し，高校調査書を活用した一般入試における主体性・協調性の評価の在り方を検討することが本稿の目的である。

2 調査書の課題

高校調査書には１.各教科の評定値，２.全体の評定平均値，３.学習成績概評，４.成績段階別人数，５.出欠の記録，６.特別活動の記録，７.指導上参考となる諸事項，８.総合的な学習の時間の内容・評価，９.備考を記入する欄がある。６.特別活動の記録には，（1）学習における特徴等，（2）行動の特徴，特技等，（3）部活動，ボランティア活動等，（4）取得資格，検定等，(5)その他と詳細に区分され記入されている。調査書を選抜資料として用いることについては，問題点が指摘されている。問題は大きく２つあり，一つは上記の１～４に関わる評定値に対するもの，もう一つは６～９に関わる高校教諭が記載する高校時代の諸活動に関するものである。

倉元・西郡・石井は，「調査書は評価結果として与えられる評定値の算出基準が曖昧であり，同一基準で評価される集団を超えては，同じ数値が学力の等価性を保証できない。」と指摘する。また，「調査書が高校教員によって作成されていることを忘れてはならない。結局，評価結果は志願者本人の活動に加えて，記述を担当した教員の力量に大きな影響を受けてしまう。すなわち，志願者本人だけではなく，教員の意欲と作文能力とを同時に評価していることになる」と指摘する（倉元・西郡・石井，2010）。

高校の調査書に記載されている評定値は，2002 年度施行の学習指導要領において，総合的な学習の実施や，教科における成績の評価方法が，それまでの相対評価から絶対評価に変更された。しかし，相対評価から絶対評価への移行はスムーズではなかったようである。山口県教育委員会の「授業づくりと評価の手引き（実践編）」（2013）には，「高校の学習評価では，観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえた学習評価を行い，授業の改善につなげるよう努力している学校がある一方で，ペーパーテストを中心としていわゆる平常点を加味した，成績付けのための評価にとどまっている学校もあるとの指摘がある。」ため，手引きを作成することで改善を求めることが記されている。そして，「学習指導と学習評価を一体的に行うことにより，生徒一人一人に学習内容の確実な定着を図り，学習評価の前提となる指導と評価の計画や，観点に対応した生徒一人一人の学習状況 を生徒や保護者に適切に伝えていくなど，学習評価の一層の改善が求められる。」「基礎的・基本的な知識・技能に加え，主体的に学習に取り組む態度に関する観点についても評価を行うなど，観点別学習状況の評価の実施を推進し，きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある。」，「学校が地域や生徒の実態を踏まえて設定した観点別学習状況の評価規準や評価方法等を明示するとともに，それらに基づき学校において適切な評価を行うことなどにより，高校教育の質の保証を図ることが求められる。」と学習評価の基本的な考え方を示している（山口県教育委員会 2013）。

手引きに従った評価を行うかどうかは高校教諭，各高校の方針に委ねられている。学習評価の基本方針は示されているが，倉元・西郡・石井らが指摘するように評定値の算出基準が曖昧であることに変わりはない。

高校時代の諸活動に関する部分については，山口県教育委員会は「学力向上推進の手引き～まなびゲーション～」（2012）で，「学習習慣の確立」，「体験的な学習活動の充実」，「自己啓発につながる活動への参加促進」を柱として身近な地域にも目を向けてコミュニケーション能力の向上を図ろうとしている。特に各種検定，資格試験の活用，各種競技会，コンテスト等への参加促進，国際理解を深める研修等への参加促進を求めている。

山口大学 AO 入試においては，高校調査書の記載をもって活動証明としているが，活動証明部分の記載に濃淡の差はない。高校は生徒の諸活動の状況を個別に聞き取りをしたりしているようである。高校調査書を用いた評価を行う場合，高校教諭個人の力量に影響

を受けるというよりは，どの高校で教育を受け，進路指導を受けたのかに影響を受け，高校時代に活動した内容も英語の外部検定試験の取得状況も変わっているのではないだろうか。

3 トラッキングと教育格差

現在進められている教育改革は格差を助長するという言説があることから，本稿では，高校調査書を一般入試においても積極的に用いることの影響を高校教育におけるトラッキングの構造から分析を試みる。

教育社会学では，教育システムが不平等を作り出す装置のひとつであるとして，「トラッキング」に注目し，学業成績による教育選抜がアスピレーションの形成にどのような影響を与えるか研究を蓄積してきた（尾嶋編 2001）。藤田は日本の高校は階層構造をなしており，各高校がトラックとして機能していると指摘し，トラッキングが「法制的に生徒の進路を限定するということはないにしても，実質的にはどのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定される」（藤田 1980）と説明する。これらの研究では，中学・高校段階での学業成績は大学進学志望を強く規定することが明らかにされてきた。

「トラッキング」に関する研究では，生徒の出身社会階層は重要な要因の一つとして研究される。片瀬はピエール・ブルデューらの文化的再生産の理論に従って，教育アスピレーションの形成について研究をしている。階層的地位の高い家族においては，親から子どもへと，その社会で正統とみなされた文化的素養や趣味・知識が伝達される。こうした正統的な文化は，学校教育で教えられる文化的知識と親和性をもっているため，家族において正統的な文化資本を受け継いだ子どもは学校という教育選抜システムにおいて，よりよい学業成績をあげたり，より高い学歴を獲得したりすることが可能になる。片瀬はこの状況を明らかにするために，家族の読書文化資本と芸術文化資本が高校生の教育アスピレーションにどのような影響を与えているか検討し，親世代の文化資本には階層差がみられ，父親・母親とも学歴が高いほど，また職業上の地位が高いほど，文化資本の保有量が多いことを確認している。しかし，子どもの読書文化資本が主として学校をつうじて獲得されることを考えると，文化的再生産のメカニズムが日本社会で作動しているとはいいがたい面があると指摘する（片瀬 2004，2005）。

親の経済状況が子どもの学力，進学に影響し，格差が固定化しているのではないかとの指摘は多くある。大学入試改革でも問題視されてはいるが，このことを実証するデータの確保は難しい。しかし，あえて分析を試みたい。大学側は入試改善の意図を明確に説明するためにも可能な限り現状を把握することが重要である。データは十分ではないが利用可能な範囲で分析を試みる。本稿では大学入試における格差の問題の中心を親の経済状況による格差とし、経済状況によって左右される進学する高等学校間の格差（学科による格差、偏差値による格差）に焦点を当て分析を試みる。親の経済状況が子どもの学力，進学に影響し，格差が固定化しているのではないかとの指摘から，親の経済状況が高い志願者は普通科あるいは理数科進学校に集まり，資格取得やボランティア，留学，科学オリンピック等の様々な活動を経験することができ，そのことが進学に有利に働く状況が生じていると仮説を立てる。

4 山口大学志願者の高校調査書の現状

4.1 入学区分別にみる高校調査書の状況

山口大学志願者の高校調査書の現状を把握するために，一般入試及び推薦入試志願者の高校調査書も AO 入試の高校時代の諸活動に関する加点評価項目に合わせて，記載内容をデータ化した。また，併せて評定値についても確認をすることとした。分析をする都合上，AO 入試で複数の分野にわたって加点評価項目を設定している３つの学部（A 学部・B 学部・C 学部）に限定をして現状を把握した。平成 29 年度入試の３つの学部の全志願者は 4,466 人であった。なお，調査書の保存年限が経過した者，その他の出願資格（高卒認定試験・大学入学資格検定等の者）を除外して 4,438 人の志願者を対象に分析を行った。また，平成 29 年度入試の３つの学部の入学者は 967 人であった。調査書の保存年限が経過した者とその他の出願資格を除外して 960 人の入学者を対象に分析を行った。

評定値については，その他の学科において高校独自の教科科目を設定しているため，教科の区分の判別が難しい志願者がおり，教科の評定を分析することは難しく，評定平均値のみを扱う。高校における諸活動については，活動の有無を分析した。高校調査書の諸活動に対する加点評価項目に関わる記載がある部分は，６.特別活動の記録，７.指導上参考となる諸事項，８.総合的な学習の時間の内容・評価，９.備考である。この部分に AO 入試の加点評価項目に関する記載があるかどうかを確認した。ボランティア活動と海外留学については，AO 入試では評価する参加日数を示しているため，高校調査書には条件を満たした者が記載されてくる。しかし，AO 入試以外の入試では条件を示していないため，軽微な活動でも参加をすれば記載

されている可能性がある。しかし，判断がつかないため，記載があれば活動したものとして扱った。

調査対象者の内訳は，表１のとおりである。志願者の評定平均値は 3.9，入学者の評定平均値は 4.0 である。志願者の入学区分別に高校における諸活動の経験（図１）では，生徒会長以外の項目で入学区分別の分析でカイ２乗検定の有意差がみられた。英語・数学の外部検定試験，ボランティアで推薦入試Ⅰの志願者が他の入学区分の志願者よりも活動経験がある。現状では一般入試は特別選抜の志願者よりも諸活動に関する記述は少ない。現状の大学入試においては一般入試において高校時代の諸活動等を評価することを伝えていないため，調査対象者は重視することなく高校時代を過ごしたかもしれない。しかし，現状のデータでは，特別選抜にチャレンジしようとする志願者は，評定平均値が高く，資格取得にチャレンジし，諸活動の経験を有する者である。一般入試の志願者はセンター試験，個別学力試験の結果で勝負をしようとしていることになる。なお，入学者の入学区分別高等学校における諸活動の経験の分析もほぼ同様の結果である。

表１　調査対象者の詳細

	志願者				入学者			
	A学部	B学部	C学部	合計	A学部	B学部	C学部	合計
前期日程	21.8%	21.2%	57.1%	100.0%	24.2%	21.2%	54.7%	100.0%
後期日程	0.0%	24.1%	75.9%	100.0%	0.0%	33.7%	66.3%	100.0%
推薦入試Ⅱ	19.4%	0.0%	80.6%	100.0%	20.4%	0.0%	79.6%	100.0%
推薦入試Ⅰ	32.4%	67.6%	0.0%	100.0%	29.0%	71.0%	0.0%	100.0%
AO入試	32.3%	15.3%	52.4%	100.0%	24.4%	16.7%	59.0%	100.0%
合計	13.0%	22.2%	64.8%	100.0%	19.9%	23.5%	56.6%	100.0%

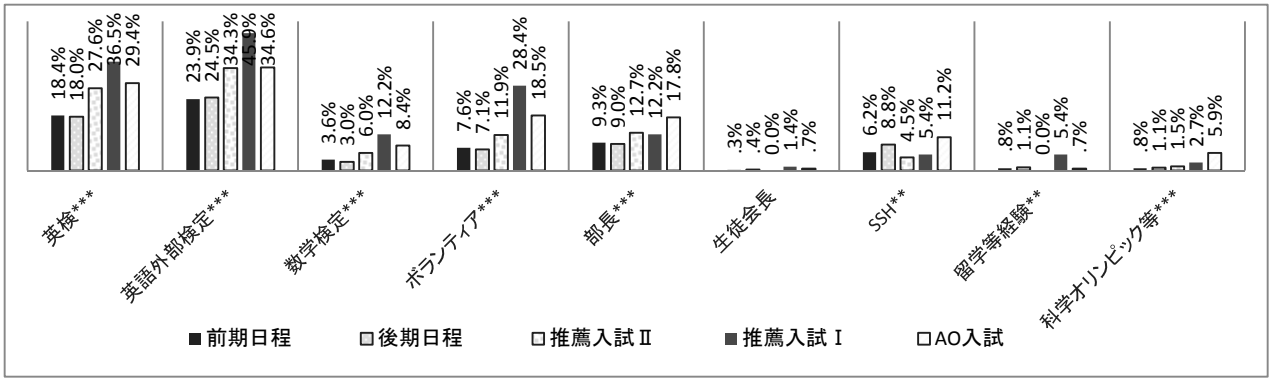

図１　志願者の入学区分別　高校時代の諸活動の有無

※英語外部検定には英検を含む。科学オリンピック等は，科学オリンピック・科学の甲子園・その他理数科目のコンテスト。

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

4.2 加点対象者は誰か

高校の学科別分析を試みる。また，高校の入学時の偏差値として公表されているデータをもとに志願者の高校偏差値で区分し，分析を試みる。高校偏差値は，中学生が情報を入手可能な進学情報サイト（みんなの高校情報サイト）を利用した。

高校の学科別評定平均値（表２）では，志願者は専門学科，総合学科の平均値が高い傾向にある。高校偏差値別評定平均値（表３）では，偏差値 60 未満の志願者の評定値が高く，高校偏差値が高いほど評定値は低くなっている。

志願者の高校の学科別高校時代の諸活動の経験の有無（図２）では英語の外部検定資格は総合学科，その他の学科の志願者が取得している傾向にある。普通科の志願者も取得率が専門学科よりも高い。数学検定やボランティア，部長，生徒会長はカイ２乗検定の有意差がみられなかった。留学経験者は英語科を含むその他の学科，普通科で割合が高い。普通科は志願者数が多いため，入学区分の人数で比べると最も多い。科学オリンピック等の参加は，専門学科，総合学科，その他の学科の割合が高く普通科の割合は低い。数学検定やボランティア，部長経験等は高校の学科別の有意な差は見られなかった。英語の外部検定試験にチャレンジしているのは総合学科，科学オリンピック等の参加経験を持つのは理数科，専門学科，その他の学科である。資格取得，高校時代の活動経験の有無だけで評価を行う場合は，高校の学科における差を評価している部分は否めない。特に SSH については顕著である。

表２　高校の学科別 評定平均値

		度数	平均	標準偏差	最小	最大	F	有意確率
志願者	普通科	4067	3.89	.5382	2.2	5.0	3.706	.005
	理数科	198	3.96	.5372	2.8	5.0		
	専門学科	24	4.17	.5417	3.1	4.9		
	総合学科	85	4.04	.5134	2.7	4.8		
	その他の学科	64	3.88	.6697	2.3	4.9		
	合計	4438	3.90	.5405	2.2	5.0		
入学者	普通科	880	4.00	0.537	2.40	5.00	1.829	.161
	理数科	40	4.06	0.507	3.10	4.90		
	専門学科・総合学科・その他の学科	40	4.16	0.585	2.90	4.90		
	合計	960	4.01	0.538	2.40	5.00		

注）入学者は専門学科、総合学科、その他の学科の入学者が少ないため、一つにまとめて分析した。

表３　高校偏差値別 評定平均値

		度数	平均	標準偏差	最小	最大	F	有意確率
志願者	60 未満	2482	3.99	.5337	2.3	5.0	84.648	.000
	60 以上 65 未満	1157	3.82	.5170	2.4	5.0		
	65 以上	799	3.74	.5402	2.2	5.0		
	合計	4438	3.90	.5405	2.2	5.0		
入学者	60 未満	497	4.14	0.512	2.50	5.00	32.106	.000
	60 以上 65 未満	275	3.93	0.520	2.40	5.00		
	65 以上	188	3.81	0.549	2.60	4.90		
	合計	960	4.01	0.538	2.40	5.00		

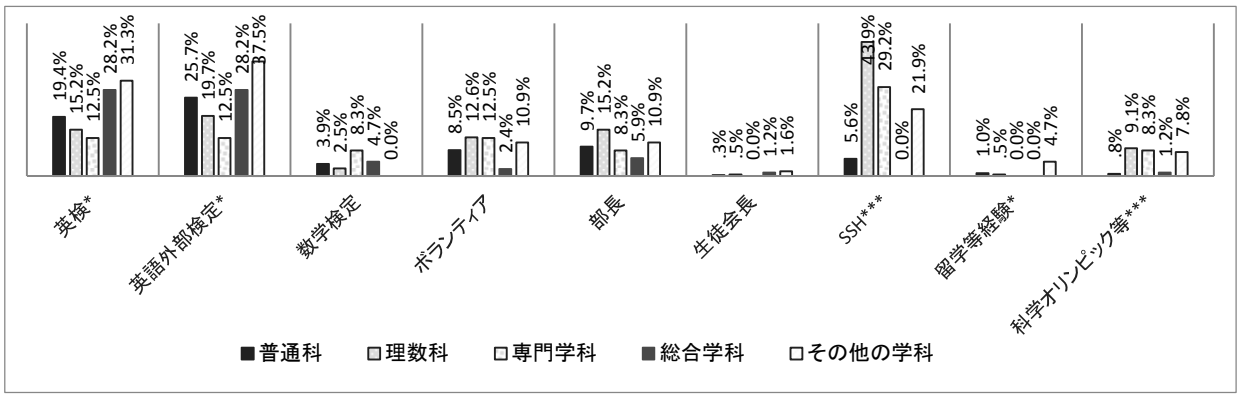

図２　志願者の高校の学科別　高校時代の諸活動の経験の有無

※英語外部検定には英検を含む。科学オリンピック等は，科学オリンピック・科学の甲子園・その他理数科目のコンテスト。

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

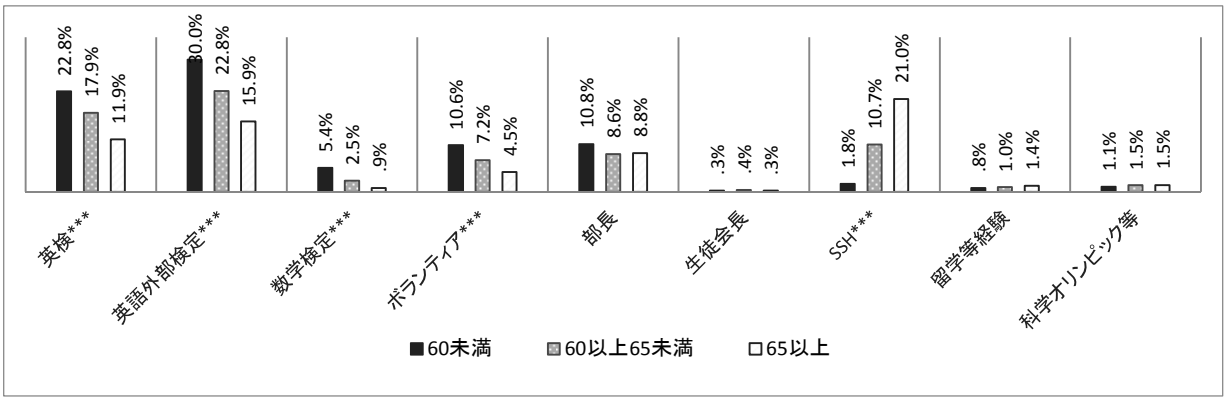

図３　高校の偏差値別　高校時代の諸活動の経験の有無

※英語外部検定には英検を含む。科学オリンピック等は，科学オリンピック・科学の甲子園・その他理数科目のコンテスト。

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

なお，入学者の高校の学科別高校時代の諸活動経験の分析もほぼ同様の結果である。続いて，志願者の高校偏差値別高校時代の諸活動経験の有無（図３）では，現状では英語の外部検定試験，数学検定，ボランティアは高校偏差値が高い学校の志願者は資格を保有したり，ボランティア活動を経験したりしていない。偏差値の低い高校の志願者が資格を取得，ボランティア活動を行って大学入試に挑んできたといえる。部長，生徒会長，留学等経験，科学オリンピック等は高校の偏差値による差は生じていない。SSH は高校偏差値が高い学校に所属する志願者の割合が高い。なお，入学者の高校偏差値別高校時代の諸活動経験の分析もほぼ同様の結果である。

そこで、山口大学授業料免除の対象者別の評定平均値について一元配置分散分析を行った（表４）。授業料免除者の評定平均値が高い傾向にある。高校の学科、高校の偏差値と山口大学における授業料免除対象者のクロス分析を行ったが，有意な差はみられず，関連は見られなかった。また，授業料免除者別高校時代の諸活動の経験の有無について分析を行ったが、有意な差は見られなかった。

表４　授業料免除の対象者別評定平均値

	度数	平均	標準偏差	最小	最大	F	有意確率
免除なし	835	3.996	.5418	2.4	5.0	3.112	.045
半期免除有	51	4.163	.5444	2.6	4.9		
通年免除有	74	4.088	.4716	3.1	4.9		
合計	960	4.012	.5381	2.4	5.0		

個別の資格取得や活動経験を見ると高校の学科や高校の偏差値による差はみられるが，総合して進学校が有利と言えるものはなかった。分析で得られた結果からは，親の経済状況が高い志願者は普通科あるいは理数科進学校に集まっているかどうか，また，経済状況が高い志願者が資格取得や諸活動経験を有しているかということを明確に把握することはできないため，この分析をもって結論を出すことはできない。最も志願者数が多い一般入試で高校調査書から得られる資格取得や活動の評価を導入することで格差がもたらされないかどうかを確認しておくためにもデータの収集，分析は継続して行っていきたい。

5 山口大学の入試改革の可能性

本稿の分析からは，偏差値の高い進学校の生徒が高校調査書を利用する入試において有利にはたらくとは言い難い。片瀬が指摘するように学校の教育、進路指導をつうじて獲得されるものがあり，文化的再生産のメカニズムが日本社会で作動しているとはいいがたい面がここに表れているとも考えられる。しかし，今後，資格取得や活動経験の有無のみを評価しようとすれば，進学校の大学進学が有利という状況が顕著に生じる可能性はまだ否定できない。多様性の時代における大学入試の開発においては，大学側も大学入試における格差の問題に対応できるよう，可能な限り現状を把握することは，重要な課題と考えている。

参考文献

朝日新聞（2018）東京本社 2018 年１月 15 日朝刊３頁.

朝日新聞（2018）東京本社 2018 年２月 24 日朝刊 24 頁.

between 情報サイト（2017）<http://between.shinken-ad.co.jp/hu/2017/09/gaibukentei-1.html>（2018.３.11 取得）

林寛子（2018）「AO 入試の高校調査書を用いた加点評価による入試改善の評価」『大学入試研究ジャーナル』,28.

藤田英典（1980）「進路選択のメカニズム」天野郁夫・山村健編『青年期の進路選択』有斐閣，118.

片瀬一男（2005）『夢の行方―高校生の教育・職業アスピレーションの変容』，東北大学出版会.

片瀬一男（2004）「文化資本と教育アスピレーション―読書文化資本・芸術文化資本の相続と獲得―」『人間情報学研究』,9,15-30.

倉元直樹・西郡大・石井光夫（2010）「選抜資料としての調査書」『大学入試研究ジャーナル』，20,29-34.

みんなの高校情報サイト　全国の高校の偏差値ランキング<https://www.minkou.jp/hischool/>（2018.３.11 取得）

文部科学省（2015）「『高大接続改革実行プランの策定』について」

文部科学省高等教育局（2017）「平成 30 年度大学入学者選抜実施要項」<www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/06/1282953_02.pdf>（2018.３.11 取得）.

尾嶋史章編（2001）『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房.

山口県教育委員会（2013）「授業づくりと評価の手引き（実践編）」

山口県教育委員会（2012）「学力向上推進の手引き～まなびゲーション～」